私が教えられて来た教会

賈　晶淳

私は余り文章を書くのが好きではありません。文章が下手な理由でもありますが、もし間違って人を傷つけたり、また整理できてないものを書くことによって、後から酷い場面に置かれるのではないかという恐れもあります。生まれつきの言葉でも嫌なのに、大人になって学んだ言葉では無理も結構あります。しかしいつまでも書けないには行けませんし、今後ともそれらをなるべく恐れずに楽しく書いて行こうかと考えております。人に誤解されない文章、そして誰でも分かってもらえる優しい言葉で書きたいのが今の願いですがそこまで行くのには、これから多くの時間と体験がいると思います。どうぞこの言葉から始まるのをお許しください。

この2月28日で私は日本に着いてから丸5年になりました。今省みると5年前韓国を飛び出すように日本へ来たことは本当に良かったなと思っております。その間、何回かの失敗もありましたが、それも全てが自分にとっては重要な体験になり、日本にいるからできることであったと思います。私が教会の仕事の場を離れて一人の自由人として生きられるように支えて下さったのは勿論百人町教会であります。その間、いろんなところで多くのことを学ぶことが出来ました。農村伝導神学校で、立教大学の木田ゼミで、それから風呂場の掃除、トラックの運転手等のアルバイトの現場で、そして百人町教会の会員として、他にも種々ありましたが、それらは一つも捨てられない学びでありました。そして今、私は今年1月から百人町教会の主任教師として働くようになりました。このことが自分として、また百人町教会として何を意味するのかというのを考えるのが最近の重要な課題になっております。しかしまだこの整理には何年もかかるかも知れませんが考え続けたいと思います。日本にはいろんな教派や教会がありますがそのなかで百人町教会はそれなりの独自な歩みを取りながらこの 27 年間ある一つの役割を担ってきたと思われます。その歴史と伝統というところから見ると、自分がそれに相応しいものであるのかには余り自信がありません。しかし、百人町教会はこの様な者でも育って下さる豊かな姿勢を持っていますので、少しは安心してこれからも多くのことを学んで行きたい心で教会の仕事に務めております。

以下ではこれまで私が百人町教会の会員の一人として学んで来たことのなかで教会ということについて少し考えさせて頂きたいと思います。私は親に連れられ3才の時から教会へ通い始めました。小学校を卒業するまで何十人もいたCSの仲間のなかでいつもあらゆる賞を独食した覚えがあります。その時、通っていた教会は律法的性格がとても強かった厳しい教会でありました。その影響は現在も自分の中に強く残っているのを時々感じられます。そしてその後成人になってから姉妹教会である蚕室中央教会へ通い始めました。最初の頃はとても慣れませんでした。いわゆる教会の社会参与の問題を始め、聖書の読み方、神学的違いで非常に悩む時期があり、それが落ち着くまで何年も掛かりました。その流れのなかで、世間の話しでは右から左へ進んで参りました。環境とはやはり恐ろしいものです。そして、今、また新しい環境に出会っています。この5年間もまた変わって来たと思います。

このような中で私を悩ませたのは信仰の形態でした。教会の中にはいろんな信仰の形態があります。もともとキリスト教会の信仰の根拠は神の御子としてこの世のため生まれ、働き、死んだイエスにあります。しかし、キリスト教伝統の中にはいろんな信仰の形態がありまして、私たちはそのなかで選んで参りました。それぞれが持つ価値はあると思いますが、キリスト教の歴史の中で彼岸的、個人的形態が強かったのは否定できません。それの全てが悪いと言えませんが、少なくともこの世の歴史を一部の支配者に任せることになりました。その時、教会は体制側に付きやすいです。その結果はこれまでの歴史が語っています。その歴史を繰り返さないようには私たちの信仰がこの世の歴史のなかで神の支配を告白することであると思います。つまりそれは神がこの世で働く事を信じ、その支配を告白することだと思います。私にとっては、日本におけるキリスト者たちの戦責告白というのはその一つの具体的な信仰告白だと思います。また韓国におけるキリスト者たちの民主化運動もその一つの信

仰告白だと思います。

そしてキリスト教のこの世での役割は神の救いの御業を行うことでありますが、そのためこれまでの教会の歴史は個人の罪にだけ焦点を合わせてきた歴史を持っています。しかしこれは、支配勢力にもっと支配し安くするものでありました。私たちが神の救いの御業に積極的に参加するのは、この世で神の支配を否定する勢力に抵抗することだと思います。つまり、この世の歴史のなかで人間を疎外し抑圧するあらゆる勢力に対しての抵抗の姿勢であります。もちろんそのためにはまず自分の中にあるそのような要素をまず否定しなければなりません。そして教会も自らが持っているあらゆる権威的な要素をも否定しなければなりません。それは個人と 2 千年間積み上げてきた教会の体質を変えることかも知りません。私はこのようなキリスト者の歴史を百人町教会とその仲間たちから見ました。それは、東神大の問題から始め、三里塚闘争、青山学院神学科の廃止に対する訴え、靖国神社の国営化の反対、韓国・朝鮮人 BC 級戦犯の裁判等の人間を疎外し抑圧するいろんな問題に教会員の一人一人が関わりを持って来た事だと思います。

このような私たちの信仰のため、私たちの教会は開かれた共同体でなければならないと思います。キリスト教はこの世を向けて一方的、あるいは閉鎖的な性格を多くもっていると思います。つまり教会は俗なる世に対する聖なる場所であるという発想を多くもっています。そのため教会は自らを俗なる世の中で守らなければならないということで、いろんな鎧で武装してきましたが、そこで、信仰は排他的、差別的要素を持つようになりました。ですから私たちは狭い意味での教会という枠だけではなく、国や民族、また宗教という枠をも越え開かなければなりません。このような情況のなかで私たちが欧米の教会だけでなく、アジアの教会、あるいは第 3 世界の教会と共に歩む歴史を作らなければないと思います。百人町教会は韓国やアジアの教会、そしてその神学とつき合い、また国や宗教をも越え民衆運動への支援活動などをやってきました。

以上でのことは私たちが全く新しい教会でも作ろうということではありません。むしろこれまで私たち個々の信仰、また私たち共同体として姿勢を聖書の伝統に基づいて捕らえ直すことであると思います。私たちはそのため、互い理解し合い、学び合い、励まし合い、また緊張し合う関係にならなければならないと思います。これまで百人町教会は教会員一人一人が、それぞれの立場からできることについて、互いに関心や支援をもってきました。またこれからもそのようになると思います。

以上はこの 5 年間、私は百人町から学んだことのなかで一部の事でありますが、他のことを含めてその学びについてとても嬉しくと思っております。しかし今の自分としてはまだ文書としても、考えとしても、整理できてないところが随分多いと思います。それらのことについては今後も学びつつ、また捕らえ直しつつ参りたいと思います。そしてこのような考えを持っている人々との新しい出会い、また開かれた関わりを楽しく作って参りたいと思います。私はこのような考えのなかでそれぞれが日本人であり、韓国人であるのは全く関係のないことであると思います。そのため私自身はこれからも牧師としての仕事を含めて、自分が百人町教会の仲間であるというのを大切にしながら、もし私が韓国人であることで何かの役に立つことがありましたら、その都度やって参りたいと思っております。特に互いに辛い思い出を持っている日韓の私たちに何かできることがありましたら幸いだと思います。

（第 133 号・1997. 5. 25.）